

# 巻 頭 言

紀要委員会 委員長 楠元雅子

「紀要」は大学や研究所の質を学内外にアピールできる場である。専門的な分野の会員の発表の場である学会誌と異なり、「紀要」はある特定の施設の研究発表の場であるので、そこにどのような教員がいて、どのような研究やさらには教育機関ではどのような教育が行われているかまでも推測が可能な重要な資料となりうる。今、第三者評価を受けることが必須となり、自己点検・自己評価も厳密に行わなければならない時代になっている。大学の専任教員として問われていることの一つは、研究実績としての発表論文数である。淑徳短大も自己評価として、過去3年間の発表論文数は不十分であると評価している。研究発表の場として「紀要」は応募しやすく、また適正な場と考えられるので、原著、報告、事例など多くの寄稿を期待している。

「紀要」ではできるだけそれぞれの専門分野の方、2人に査読をお願いしているが、時間に制限がありながら極めて適切にご意見をいただき、それに対して著者の真摯な論旨の説明や反論をいただき、何回か往復をすることもあるが、非常に有効に査読制度が機能していると思っている。査読をしていただいた先生方にこの場を借りて御礼を申し上げ、今後の査読依頼にも快く応じていただければ幸いである。

先日の教授会で学長が言われた、すなわち日本学術会議が示す科学者としての行動規範、特に研究活動での留意点を肝に銘じておきたい。研究論文に盗用があってはならないし、データのねつ造や改ざんがあるはずのないことと考えられる。学生を指導する教育者としては考えられないことである。盗用と思われぬためには引用した所を出典とともに極めて明確に示し、誤解を招かないようにすべきである。また査読者はそれを見落とさないような幅広い知識も必要になる。この「紀要」を淑徳短大に所属する者が自慢にできる価値の高い研究発表の場であるよう全員で努力していきたい。

2007（平成19）年2月